

夢と志～「長州ファイブ」に触れて～

越谷北高等学校長 下山 忍

今日は「夢と志」というお話をしたいと思います。8月にPTAの全国大会が山口県で開催されまして、私もPTAの役員さんと一緒に参加して参りました。山口県は江戸時代には長州藩と呼ばれていました。幕末から明治維新にかけて、我が国を動かしたといっても過言ではありません。幕末の志士に、吉田松陰という人物がいますが、山口県では、今でも「吉田松陰先生」と呼ぶ人が多いようです。郷土への誇りを感じました。

そうした中で「長州ファイブ（五傑）」の話を聞きました。「長州ファイブ」とは、幕末、長州藩からイギリスに留学した5人の若者、すなわち伊藤博文・井上馨・井上勝・遠藤謹助・山尾庸三のことです。何年か前に映画にもなったので、知っている人もいるかもしれません。初代内閣総理大臣の伊藤博文や外務卿・外務大臣として条約改正に尽力した井上馨は有名ですが、井上勝・遠藤謹助・山尾庸三の3人も、鉄道や近代産業、貨幣制度などそれぞれの分野で、我が国の近代化に大いに力を尽くした人たちです。



さて、5人がイギリスに留学した時代は、西洋列強がさまざまな力を持って押し寄せた時代でした。1853年のペリ来航とその後に結んだ条約によって、西洋諸国との通交が始まります。長州藩はこの頃「尊王攘夷」という立場で、外国船を打ち払ったり、その報復攻撃を受けていましたが、その一方で、5人の若者をイギリスに留学させました。留学と言っても、当時の日本は海外への渡航が認められている訳ではないので、密航という方法で渡航させます。彼らは、先ず、中国の上海に渡り、そこから4か月かけてイギリスに渡りました。幕府に見つかれば死罪の可能性もあり、また船旅もとても困難を極めたということですから、文字通り命がけの留学だったのでしょう。

イギリスに着いた5人は、ここで初めて英語を学びますが、その上達は驚くほど早かったということです。そして、ロンドン大学で一心不乱に勉強します。彼らの猛勉強ぶりはイギリス人にも知られ、現在、ロンドン大学には「長州ファイブ」の顕彰碑が建てられているそうです。

5人は、なぜ命がけで勉強したのでしょうか。それは、彼らが、勉強を自分

だけのことと考えていなかったからだと思っています。西洋列強に対して遅れていた我が国の独立を守るためには、1日も早く近代化しなければならない。そのためには自分たちが西洋文明を学ばなければならないという、強い「志」があったからだろうと思っています。そして、日本に帰国した彼らは、存分に自分の役割を果たしました。

さて、PTA全国大会のテーマは「夢から志へ」というものでした。「夢」とは「将来実現させたいと思っている事柄」のことで、「将来の職業」を指すことが多いと思います。「志」とは、目的を定めてこれを成し遂げようとすることです。子どもの頃から持ち続けた夢を実現するために、高校時代に、大きな志を立ててほしい、という意味を持っている言葉です。

私は、それぞれが抱く「夢」とは、自分一人だけにとどまるものではなく、多くの人々のために、そして世の中のために、大切な何かを成し遂げようとするものであったほしいと思っています。本校の校訓は、「立志」「探究」「奉仕」です。「立志」は、志を立てると書きます。「奉仕」とは、私心を捨てて、世の中のために働くことです。

私たちの生きる現代は幕末ではありませんが、幕末と同様に克服すべき課題は様々な分野に山積しています。生徒の皆さんには、それぞれの分野で将来それを克服する役割を果たしてもらいたい。そして、そのために、今大いに勉学に励んでほしいと願っています。

吉田松陰の言葉に「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし、故に、夢なき者に成功なし」というものがあります。

第1学期の終業式で、私は「目的意識をもって夏休みを過ごしてもらいたい」というお話をいたしました。43日間、いかがだったでしょうか。ある程度満足のいく生活を送れた人と、そうでなかった人がいると思います。いずれの人も、夏休みの成果を踏まえ、次の目標を立ててください。それは2学期終了時点でもよいし、1か月でも結構です。それでは、2学期、頑張っていきましょう。

